奈文研ニュース
2005.Sep No.18
NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
独立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp

東アジアの古代苑池

ー飛鳥資料館秋期特別展示ー 10月22日～12月11日

奈良文化財研究所は、2001年に中国陝西省西安市に所在する唐長安城大明宮太液池遺跡を対象とした中国社会科学院考古研究所との共同調査を開始し、本年度はその最終年度にあたります。また、近年、飛鳥京跡の苑池遺構や内郭中枢における苑池の発見、平城宮東院庭園の発掘調査報告書の刊行など、古代の苑池をめぐる調査成果が蓄積されています。

本展覧会では、日中共同研究である太液池遺跡の共同調査の成果の一端をいち早く公開したいと考え、東アジア諸国(唐、新羅、渤海、日本)において７～８世紀につくられた古代苑池に関する最新の調査成果を含む展示をおこない、苑池からみた古代東アジアの文化交流・伝播について考察を加えます。

主な展示品としては、太液池遺跡出土遺物、中国河南省洛陽市上陽宮園林遺跡出土遺物、中国黒龍江省寧安県東京城遺跡出土遺物(東京大学所蔵)、奈良県明日香村飛鳥京跡苑池遺構出土遺物(奈良県立橿原考古学研究所所蔵)、平城宮東院庭園出土遺物があげられます。このうち、太液池遺跡と上陽宮園林遺跡出土のものは、中国社会科学院考古研究所の所蔵品で合計54点にのぼります。唐三彩壺・枕、緑釉瓦、飾金具、石像など多様な遺物は、いずれも過去に雑誌や講演などで紹介されただけで、実物の展示は本邦初となるものです。また、東京城遺跡とは渤海の都城であった上京龍泉府跡のことです。このほか、韓国慶州市に所在する雁鴨池遺跡や龍江洞苑池遺跡についてもパネル展示をおこないます。

展示品の１つ　大明宮太液池遺跡出土石象

激動の時代であった７～８世紀に東アジア諸国で相次いでつくられた苑池、そして、その頂点にあったともいえる唐の太液池、それらは水面に何を映していたのでしょうか。

当館学芸室では、昨年末に当時の町田章館長からの提案を受けて以来、実施にむけての作業をおこなってきました。とはいえ、現在の学芸室のスタッフにとっては、海外の資料を借用して展示することは未経験のことでしたので、途方にくれることもありました。しかし、パートナーの中国社会科学院考古研究所、所蔵品や写真資料をお貸しくださった橿原考古学研究所・東京大学・韓国の国立慶州博物館・嶺南文化財研究院、そして奈文研他部署などの皆様のご協力によって、なんとか前進してまいりました。本当に感謝しております。

それでは、皆様、飛鳥の地でお待ちしております。

（飛鳥資料館　加藤 真二）

「東アジアの古代苑池」

2005年10月22日～12月11日（会期中は無休）

主催：飛鳥資料館・中国社会科学院考古研究所・中国文物交流中心・明日香村

後援：朝日新聞社

特別講演会：10月23日（日）午後１時30分～ 飛鳥資料館講堂

「唐・二都発掘物語ー長安と洛陽ー」

講師

中国社会科学院考古研究所研究員　陳 良偉

平城宮跡発掘調査部研究員　今井 晃樹

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院東第六堂（飛鳥藤原第136次）

藤原宮（694～710）の中枢部である大極殿院・朝堂院は、すでに戦前～戦中にかけて日本古文化研究所によって発掘調査がおこなわれています。しかし、この調査は柱の想定位置だけの発掘だったため、建物の細部など不明な点が残されていました。そこで当調査部では、７年前から平面的な発掘調査をおこなっており、今回はその８回目にあたります。

調査対象は朝堂院の東第六堂。朝堂院は国家的な政務や儀式・饗宴の場として使われた臣下の空間で、天皇の空間である大極殿院の南方に位置します。ここには12棟の朝堂が東西対称に並んでおり、東第六堂はもっとも南に建つ東西に細長い建物です。また、朝堂は、役人の着座する場所が決まっており、平安宮（794～）の例をみると、東第六堂は、民政・租税徴収などを掌る民部省・主計寮・主税寮に属する役人の座があったと推定されています。

今回の発掘調査は、東第六堂の全容を明らかにするため、南北31m・東西67m余、面積2,062㎡の調査区を設定しました。藤原宮朝堂の再発掘は、これまで東第一堂・東第二堂・東第三堂と進めてきましたが、土地や水路などの関係から、建物の半分程度の発掘しかできませんでした。今回は念願かなって、はじめて朝堂の建物全体を発掘しています。調査は昨年10月から始めましたが、今年１月～３月に一時中断し４月に再開。８月になってようやく全貌が明らかになってきました。

まず、東第六堂は、基壇上に建つ瓦葺きの礎石建物で、南北に庇がつき、切妻造の屋根をもつことが確定しました。規模は、間口（東西）12間（約49.1m）・奥行（南北）４間（約11.2m）という長大なものです。これは第二～第四堂の、間口（南北）15間（約60.9m）に比べると一まわり小さいのですが、写真からもおわかりいただけるように、なかなかの大きさがあります。じつは藤原宮の朝堂院は、南北約320m・東西約235mにおよび、日本の都城のなかでもっとも広い空間を占めています。そして、朝堂の建物自体も巨大であることが特徴なのです。

柱位置には直径約1.5～２mの穴を掘り、拳大から人頭大の石を詰め込んで、中央部には礎石底部の凸凹にあわせて二・三重に積み上げていました。礎石は大部分が持ち去られていますが、そばに穴を掘って落とし込んだものが２個あります。いずれも花崗岩製で、長さが約１m・幅と高さは約80㎝を測る大形のものです。

基壇の外周部はやや低くなっており、礫が敷かれていました。朝堂院の中央部は広大な庭（朝庭）で、役人たちが列立することになっていましたので、地面がぬかるむのを防ぐために礫が敷かれたものと思われます。

また、藤原宮から平城宮に遷都した際、東第六堂の瓦はリサイクルされましたが、使用不可能な瓦は基壇外周部に捨てられたようです。今回の調査では、現在のところ、コンテナ（62×40×16㎝）で3,000箱以上にのぼる膨大な量の瓦を取りあげました。藤原宮は日本で初めて瓦葺きを採用した宮殿ですが、その生産や運搬には多くの労苦を伴ったのだろうと、瓦詰めのコンテナを運ぶたびに実感しています。

調査はまだまだ続きます。私はこれまで東第二堂・第三堂の発掘を担当してきましたが、調査の最終段階で思いがけない発見に遭遇し、予定どおり現場が終わったことがありません。今回はどんな発見があるのか、恐ろしくも楽しみです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　市 大樹）

藤原宮朝堂院東第六堂（北東から）　背後は畝傍山

旧大乗院庭園（平城第390次）

大乗院は、今の興福寺境内の北側にひろがる一乗院と並ぶ興福寺門跡寺院です。もともと一乗院の東側にあったものが、治承５年（1180）に元興寺の子院である禅定院のあった現在地に移転しました。その後、宝徳３年（1451）に徳政一揆によって焼失しましたが、尋尊（じんそん）によって建物及び庭園が整備され、その後の庭園の骨格ができました。これが、その後、改修を加えながら江戸時代にまで存続し、その情景が『大乗院四季真景図』（江戸末期）などに描かれているのです。この調査はナショナルトラストから依頼され、その姿を発掘で確認し、整備の資料とするために毎年継続しておこなっているものです。

今年度の調査は、旧国鉄（現JR）の宿泊施設であった大乗苑が建っていた地点からこれまでの一連の発掘調査で全貌がほぼわかりかけてきた西小池の西岸にかけての位置です。調査は７月19日から重機による上土及び鉄筋建物の基礎の撤去等を開始し、７月29日より手掘りを開始しております。

今回の調査区と絵図の対照

江戸時代の層の下から顔を出した室町時代の砂層と土器

庭園の重要な構成要素である西小池が埋まって以後、当地点は奈良でも歴史のある飛鳥小学校や建設会社の倉庫、そして大乗苑など幾多の遍歴を遂げているため、江戸時代の姿を明らかにするまで多少の手続きが必要で、右下の写真がおそらく池西岸を埋め立てた後の姿と思われます。これを記録して、池が機能していた時期の具体的な様相を明らかにしていく予定です。

それにより、西小池の全容をつかみ、その南からの排水施設も確認する見通しです。さらに、絵図に描かれている池の西側に建てられた湛雪亭（たんせつてい）と塀などの施設がつかめるかもしれません。

（平城宮跡発掘調査部　高橋 克壽）

調査区南端の東西溝（大池からの水を排水する施設）

池の西側に広がる南北溝（南から）

横座りの馬

ここに載せた馬の埴輪は、京都府木津町音乗谷（おんじょがたに）古墳から出土した珍しい馬形埴輪です。鞍の右側に表現されたブランコ状のものは、反対の左側にはなく、両足をそろえて水平の板の上に置き、横向きに鞍にすわるための特別な装置と見られます。同種の馬装を見せる馬は、これまで主に関東地方から出土していましたが、平成17年３月刊行の学報『奈良山発掘調査報告Ⅰ』で報告されたこの埴輪は、近畿地方をはじめ西日本でも広く存在していたことを教えてくれました（写真左：高さ58.0㎝）。

横座りの馬のほかにも、音乗谷古墳の造り出しには、豪華に飾られた王が騎乗したであろう馬、鞍と手綱をつけた馬、手綱だけをつけた馬など各種の馬とともに、牛や犬、鳥などのさまざまな動物埴輪が人物埴輪とともに置かれていました。そして、墳丘周囲を取巻いて円筒埴輪とともに玉杖や双脚輪状文の埴輪がにぎやかに飾り立てていたことがわかりました（写真右）。近畿地方の６世紀前半を代表する埴輪が報告書の作成作業により30年ぶりに甦ったのです。

（平城宮跡発掘調査部　高橋 克壽）

環境考古学の調査協力

金海会峴里貝塚

韓国釜山の西に接する金海市街地の独立丘陵に金海会峴里貝塚があります。この貝塚は隣接する鳳凰台遺跡とあわせて国史跡に指定され、鳳凰洞史跡公園として整備中です。貝塚近くには支石墓があり、史跡内には竪穴住居、高床式倉庫、佐賀県吉野ケ里遺跡を思わせる高殿建物も建てられ目を引きます。

今回の会峴里貝塚の発掘は、貝層展示施設の建設のため、金海市の委託により㈳慶南考古学研究所が2005年２月からおこなっているものです。私はその研究所から環境考古学的分析の協力依頼を受け、３月から８月にかけて４回、現地を訪問し、発掘指導および分析試料の採取に協力しています。

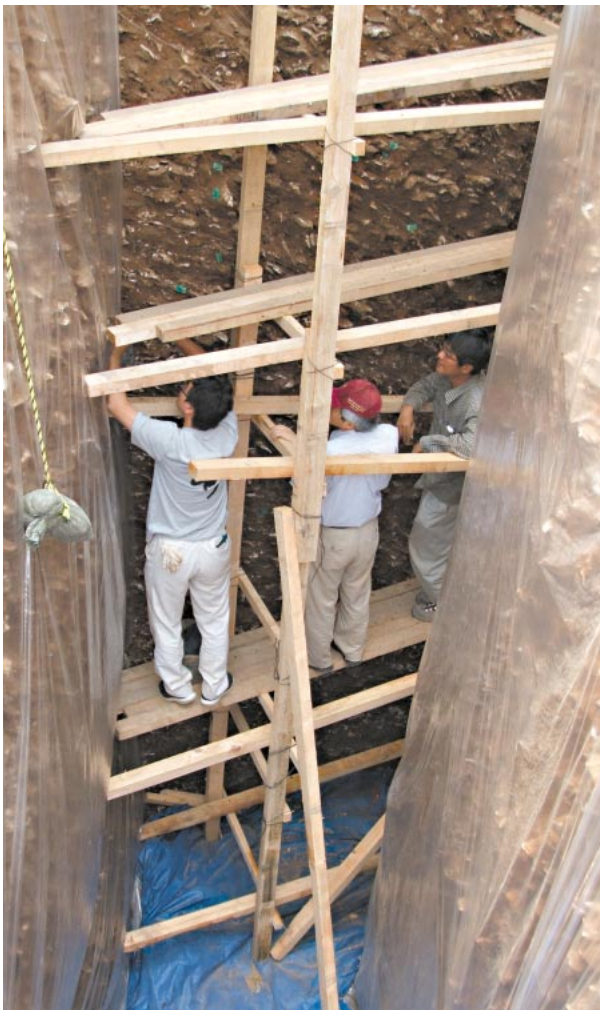
会峴里貝塚はマガキ、ハマグリを主体とする鹹水（海水）性貝塚で、大河、洛東江が作り出した広大な沖積地を見下ろす西の丘陵上に位置します。この貝塚は戦前、主として日本人による発掘が８回おこなわれ、なかでも1920年の京都帝国大学の浜田耕作と梅原末治や、後に奈文研の平城調査部長を務めた榧本亀治郎による1934年の発掘がよく知られています。戦前の発掘で貨泉（王莽が建国した新（A.D.８～23年）が鋳造した銅銭）や、灰色の硬い新羅焼きの土器も出土することから、紀元１世紀～４世紀にかけての年代が推定されてきました。

戦前の発掘でも貝層が４m以上堆積していることがわかっていましたが、今回は、その隣接部に一辺10m、幅1.5mほどの「コ」の字形のトレンチを入れて発掘しました。貝層を形成するカキは30㎝を越える大きなものが多く、ハマグリも現代ではなかなかお目にかかれない大型のものばかりです。その他にアカニシやレイシ、バイなどの巻貝や、イガイ、オキシジミなどが少量含まれています。発掘が進むにつれ、貝層はさらに深く堆積していることが明らかになり、とうとう８m以上にも達しました。トレンチの上にはテントをはり、トレンチ内には４階建ての足場を組んで貝層の実測やサンプリングをおこなっています。貝層は５～10㎝ほどの層が100層以上に分かれて堆積していることが観察できます。

５月には名古屋大学の中村俊夫教授と共に貝層断面から貝殻、炭化物などのAMS放射性炭素年代測定のための試料を採取し、フローテーション法などの指導をしました。８月には奈良教育大学の金原正明助教授らと共に、花粉、珪藻、寄生虫卵、プラントオパールなどの分析用の試料を採取しました。

貝層は金海式土器が主体で、砥石を除いて石器はほとんど見られず、鹿角製の工具柄には、鉄器の基部が残ったものもあり、青銅器は見られず、すでに利器が鉄器に置きかわっていたことを示します。

貝層の下層から上層を通じて、鹿角の切断には、鋸が多用されており、韓国における鋸の使用が日本よりも200～300年古くなることを示しています（日本での鋸の使用は、松山市宮前川遺跡群の３世紀の庄内式土器を伴う竪穴住居床面出土の骨角器が古い例）。動物はニホンジカが多く、小型のシカ科であるノロやキバノロがわずかに含まれます。イノシシ、またはブタは少数で、現在、ＤＮＡや炭素・窒素同位体による食性分析により野生か飼養されていたかの分析をおこなっています。イヌも出土しましたが、縄文貝塚のように埋葬されたものは無く、散乱状態でした。　（埋蔵文化財センター　松井 章）



貝層から放射性炭素年代測定用のサンプルを採取中
2005年５月松井撮影

文化的景観に関する研究会

吉野・大峯、熊野三山、高野山の霊場とそれらを結ぶ参詣道が、昨年世界遺産に登録され話題になりました。「紀伊山地の霊場と参詣道」という文化的景観です。また、昨年は文化財保護法の中に文化的景観の保護制度が新設される（施行は今年４月）という画期的なできごともありました。このように最近、文化的景観がたいへん注目を集めていますが、当研究所でも以前から研究を進めてきており、来年度からはさらに組織的な調査研究を始める予定です。

文化的景観とは広い意味では、人間と自然との共同作品（世界遺産条約）ですが、文化財保護法では「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」としています。奈良県内では、条里水田（桜井市）、神奈備（かんなび）の郷（さと）（明日香村）、吉野杉の林業景観（川上村）、二上山（葛城市）などが候補です。文化的景観の最大の特徴は、地域の人々の生活や生業によって成り立っていることです。そのため、保護には地域住民の合意や協力が必要不可欠です。例えば、棚田であれば水田の耕作が継続されなければなりません。しかし、人々の生活や生業が将来にわたって確実に維持・継続されていく仕組みをつくるのは簡単ではありません。そこでそれぞれの文化的景観の本質を構成する要素を明らかにし、維持する方法や代替策を十分に考えるための調査研究が必要になってきます。

今年度は、来年度を見すえて、参加者11人程度で研究会を開いています。これまでの４回の研究会では、論文や各種資料などで情報収集し、文化庁や県の担当者に今後の方針や景観法との関係などについてお聞きし、意見交換をしました。次回は代表的な文化的景観について現地を訪れ、実際の状況を把握することにしています。

文化的景観は、保護制度ができたばかりであり、保護・活用上の問題も多いと予想され、今後のなりゆきは未知数です。しかし、複合的な価値をもつ文化財であるため、考古・歴史・建築・造園・文化財科学の研究者が所属する当研究所の学際的な特長を存分に活かすことができる研究分野でもあります。実際の保護施策に貢献する調査研究をしていきたいと考えています。　（文化遺産研究部　中島 義晴）

飛鳥資料館のみどころ（10）

展示品解説　その２
「須弥山石」

飛鳥資料館は前回紹介した石人像に加えて、もう一つ、石造物を展示しています。それが円形の石を３つ重ね、全面に山並みを浮き彫った須弥山石（重要文化財）です。

文様と内部構造から、現状の下から第１石と第２石の間にも同様の石があったことを想定でき、これらを積み上げると高さ3.4mほどに復原できます。石の内側はくりぬかれており、第１石の下面に穿たれた細い円孔から、サイホンの原理により内部に水をため、第１石の側面ケ所の穴から噴き出させる噴水施設と考えられています。

明治35年（1902）に飛鳥寺の北西の水田（現石神遺跡）で発見されたこの石造物については、その発見当初からさまざまな議論がありましたが、後の発掘調査により、石神遺跡が飛鳥時代の迎賓館と想定され、推古朝に１度、斉明朝に３度、『日本書紀』に記される「須弥山像」のいずれかにあたることは間違いないと考えられています。

こうした須弥山石は、『日本書記』斉明６年（660）５月条で、「高さ廟塔の如し」と記され、その姿は、飛鳥資料館の庭に復原展示した須弥山石に見ることができます。水が噴き出すその様子は、常に動きを見せる珍しい展示物となり、館内展示の須弥山石のイメージをより豊かなものにしています。

（飛鳥資料館　清永 洋平）

須弥山石

■　記　録

埋蔵文化財センター研修

○地方官衙遺跡調査課程専門研修
　平成17年７月12日～７月26日　　12名
○埋蔵文化財基礎課程一般研修
　平成17年８月22日～８月30日　　20名
○遺物観察調査課程一般研修
　平成17年８月30日～９月16日　　10名

飛鳥資料館夏期企画展

○展示
　平成17年８月２日（火）～８月31日（水）
○特別講演会
　平成17年８月６日（土）午後２時～
　「古墳を飾る－音乗谷古墳の埴輪－」
　高橋 克壽　平城宮跡発掘調査部主任研究官

発掘調査現地説明会

○平城第389次（平城宮中央区朝堂院）
　平成17年6月18日（土）　516名
○飛鳥藤原第136次（藤原宮朝堂院東第六堂）
　平成17年8月27日（土）　727名

平城宮跡解説ボランティア

○第４期募集を実施し、新たに32名の追加登録をおこない、総勢148名となった。

■　お知らせ

公開講演会

○平成17年10月１日（土）午後１時30分～
　於：平城宮跡資料館講堂
　田辺征夫　所長
　市　大樹　飛鳥藤原宮跡発掘調査部研究員
　神野　恵　飛鳥藤原宮跡発掘調査部研究員

講演会（NPO平城宮跡サポートネットワークと共催）

○平成17年10月16日（日）午後１時30分～
　於：平城宮跡資料館講堂
　東野治之　教授（奈良大学）

飛鳥資料館秋期特別展

○展示　「東アジアの古代苑池」
　平成17年10月22日（土）～12月11日（日）
○特別講演会
　平成17年10月23日（日）午後１時30分～
　於：飛鳥資料館講堂

発掘速報展

○奈良の都を掘る－平城2005－
　平成17年10月25日（火）～11月30日（水）

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.jp
Eメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2005年９月